

公開実用 昭和 59

141075

① 日本国特許庁 (JP)

② 実用新案出願公開

③ 公開実用新案公報 (U)

昭59—141075

51 Int. Cl.³
B 65 D 83 06
47:20
83:00

識別記号

庁内整理番号
7617—3E
8208—3E
7617—3E

④ 公開 昭和59年(1984)9月20日

審査請求 有

(全 頁)

⑤ 計量部付容器

伊丹市安堂寺町3丁目3番地池
田工業株式会社内

⑥ 実 願 昭58—34475

⑦ 出 願 人 池田正躬

⑧ 出 願 昭58(1983)3月9日

芦屋市西山町17番10—116号

⑨ 考 案 者 大沢皓年

⑩ 代 理 人 弁理士 鳥田璋子 外1名

特許
出願

明 細 書

1、考案の名称 計量部付容器

2、実用新案登録請求の範囲

1. 容器本体上部に透明または半透明材料よりなる目盛付円筒を前記容器本体と一体または別体に設け、前記目盛付円筒内に外部より開閉操作可能な仕切部を設けてなることを特徴とする計量部付容器。
2. 容器本体上部に突出口を有し、前記突出口に透明または半透明材料よりなる目盛付円筒を螺嵌してなり、前記目盛付円筒の締緩操作によつて前記突出口を開閉し得る仕切部を前記目盛付円筒内に設けたことを特徴とする実用新案登録請求の範囲第1項記載の計量部付容器。
3. 前記突出口は、前記目盛付円筒体に螺合する円筒状部と、前記円筒状部上方に接続し外

周面に小穴を設けた円錐台部とからなり、前記仕切部は、前記円錐台部の上部に係合する穴部をその中央に設けたことを特徴とする実用新案登録請求の範囲第2項記載の計量部付容器。

4. 前記突出口は、前記目盛付円筒体に螺合する円筒状部と、前記円筒状部上方に接続し上部に小穴を設けた円錐部とからなり、前記仕切部は、中央に前記小穴に対応する係合突部を有し、前記係合突部周辺に穴部を設けたことを特徴とする実用新案登録請求の範囲第1項記載の計量部付容器。
5. 前記目盛付円筒の上端に径小な外口を設け、前記外口を開閉し得る蓋を有することを特徴とする実用新案登録請求の範囲第1項記載の計量部付容器。

3、考案の詳細な説明

本考案は計量部付容器に関し、詳しくは液体

成分を収納する容器本体と、容器本体に接続し必要時に所望量の液体成分を取り出せるようにした計量部とからなる容器に関する。

従来、植物栽培に用いる殺菌剤、殺虫剤、肥料等の液体成分を必要量取り出して用いる際には、前記液体成分を収納容器のキャップもしくは適当な計量カップに移して計量した後に必要箇所に注入するという手段がとられていた。このようにして別容器に一たん移した後注入すると、手数がかかるばかりでなく、液で手が汚れてしまうことも多かつた。このようなことは、特に、高濃度の殺菌剤や殺虫剤を取扱う場合に、衛生上の理由からも避けるべきである。又、使用する液体成分が悪臭の強いものである場合には、計量操作を密閉系で行なうことが必要となってくることは言うまでもない。

本考案者らは、従来品のこのような欠点を克服すべく種々研究の結果、計量操作を清潔で簡



単にしかも密閉系で行なえる容器を考案するに至った。

すなわち、本考案の容器は容器本体上部に目盛付円筒を設けており、使用に際しては液体を容器本体からこの円筒に移して計量した後植物栽培用容器に注入するのである。

以下に本考案を添付図面に従って説明する。

第 1 図において、(1) は本考案に係る計量部付容器の容器本体であり、この容器本体 (1) の上部に突出口 (3) が設けられ、この突出口 (3) は目盛付円筒 (2) で螺嵌されている。

前記突出口 (1) は外周に螺刻された円筒状部 (5) とその上方に接続する円錐台部 (7) とから成っており、前記円錐台部 (7) の外周面には小穴 (9) が設けられている。

(2) は前記突出口 (3) に螺合する目盛付円筒であり、透明または半透明材料よりなっている。目盛付円筒 (2) はその内部に仕切り部 (23) を有してお

り、この仕切り部 (23) の中央には前記突出口 (13) の円錐台部 (17) と密着係合するように穴部 (25) が設けられている。従つて目盛付円筒 (21) を回してねじをゆるめると前記円錐台部 (17) の外周面と前記穴部 (25) の内周面との間にすき間ができこを液が流れる。

前記円筒 (21) には仕切り部 (23) より上方長手方向に少なくとも 2 列の目盛を刻み、その 1 方は円筒 (21) 上部に行くに従つて大きな数値となり、他方は円筒 (21) 上部に行くに従つて小さな数値となる。

前記目盛付円筒 (21) の上端には径小な外口 (27) が設けられており前記目盛付円筒 (21) で計量した液を出すことができる。この外口 (27) は円筒上縁部に連接して設けた蓋 (29) により開閉可能となつてゐる。

この計量部付容器を使用する場合は以下の手順による。

図 1

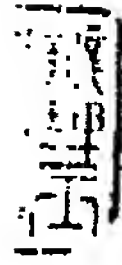
まず蓋 (29) を外口 (27) にかぶせた後、容器を反転させ上下を逆にする。

次に目盛付円筒 (21) を回してゆるめ液 (31) を円筒 (21) 内に流れ込ませる。液は前記小穴 (19)、前記円錐台部 (17) の外周面と前記穴部 (25) の内周面との間のすき間、および前記穴部 (25) を順次通っていく。この際、液量は図において円筒 (21) の右半分の目盛ではかる。円筒内に液が所望量入れば円筒 (21) を回して締め液の流入を止める。仮に液を入れ過ぎた場合には、容器を再度反転させ図において円筒 (21) の左半分の目盛を見ながら円筒 (21) の締緩操作によつて液量を調節すればよい。

次に、適当な箇所ではずし蓋 (29) をはずし液 (31) を栽培用容器に注入する。

第 2 図は突出口 (13) と仕切り部 (23) の他の実施例を示す図である。

突出口 (13) は外周に螺刻された円筒状部 (15) とその上方に接続する円錐部 (18) とから成っており、



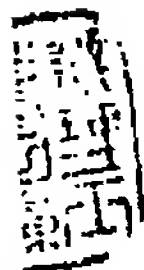
前記円錐部 (18) の上部には小穴 (19) が設けられている。

仕切り部 (23) はその中央に前記小穴 (19) に対応する係合突部 (24) を有し、前記係合突部 (24) の周辺には適数の穴部 (25) が設けられている。

円筒を回してゆるめると液は図の矢線で示す経路を通って流れる。

第 3 図に示す実施例は目盛付円筒 (21) の上部にチューブ (28) を設けたものであり、狭小な箇所には液を注入するのに適している。

第 4 図に示す実施例は容器本体 (11) を仕切り板 (12) で 2 部屋に分けたものであり、それぞれの部屋には目盛付円筒 (21) が設けられており、それぞれ計量操作が可能である。従つて種類の違う液成分を同一容器で販売並びに保管できて便利である。図では示さなかつたが、必要に応じて容器本体を 3 部屋以上に分けそれぞれ目盛付円筒を設けることも可能である。



このように本考案の計量部付容器は栽培用容器に殺虫剤等の液体成分を一定量注入する操作において、簡便にしかも手を汚すことなく液を計量できる。

4、図面の簡単な説明

第1図は本考案の実施例を示す正面断面図であり、第2図は他の実施例を示す一部省略断面図であり、第3図および第4図は他の実施例を示す正面図である。

符号の説明

1 1 … 容器本体、1 3 … 突出口、1 5 … 円筒状部、1 7 … 円錐台部、1 8 … 円錐部、1 9 … 小穴、2 1 … 目盛付円筒、2 3 … 仕切り部、2 4 … 係合突部、2 5 … 穴部、2 7 … 外口、2 9 … 蓋。

630

実用新案登録出願人

池 田 正 躬

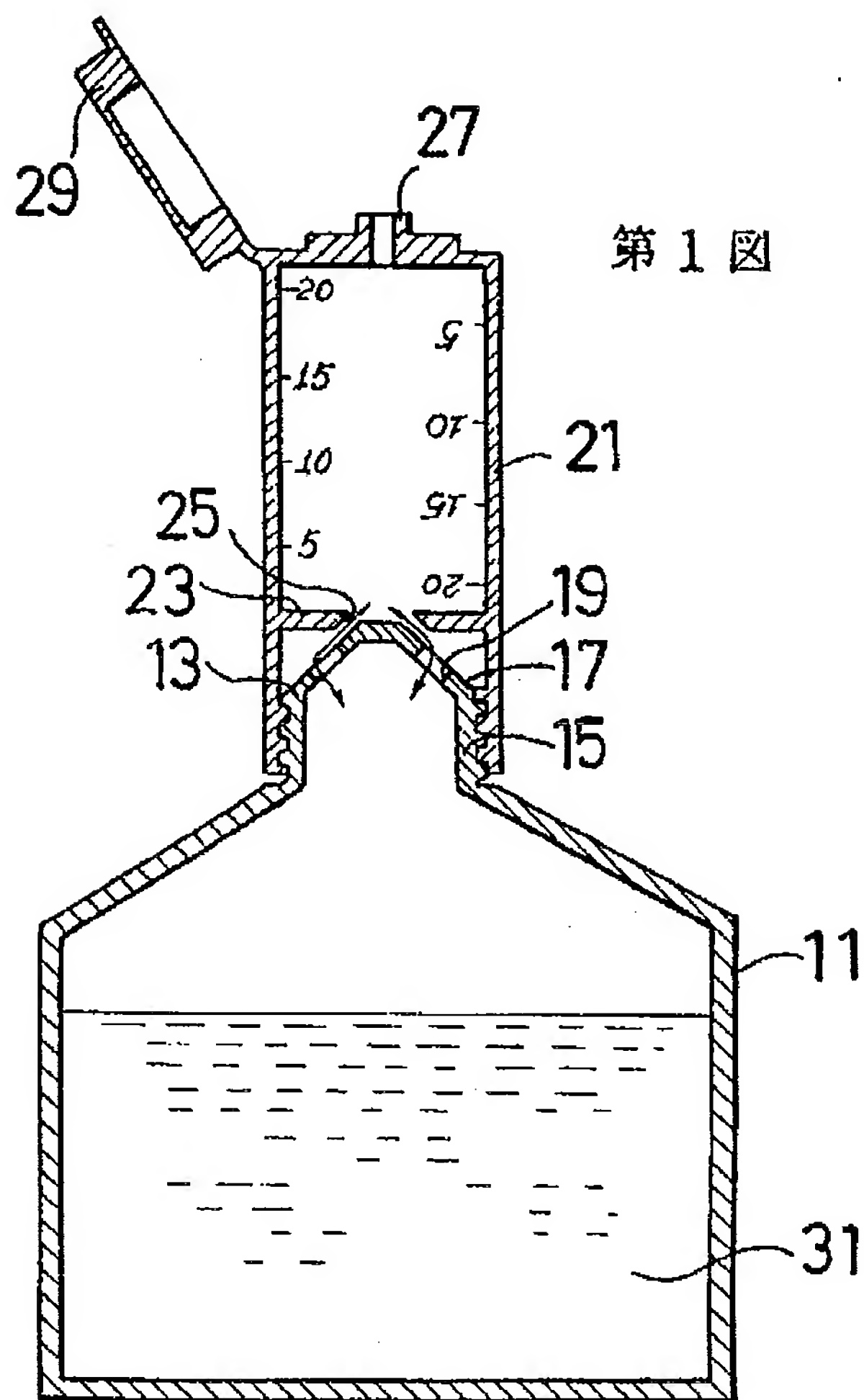
代 理 人

薦 田 璋 子

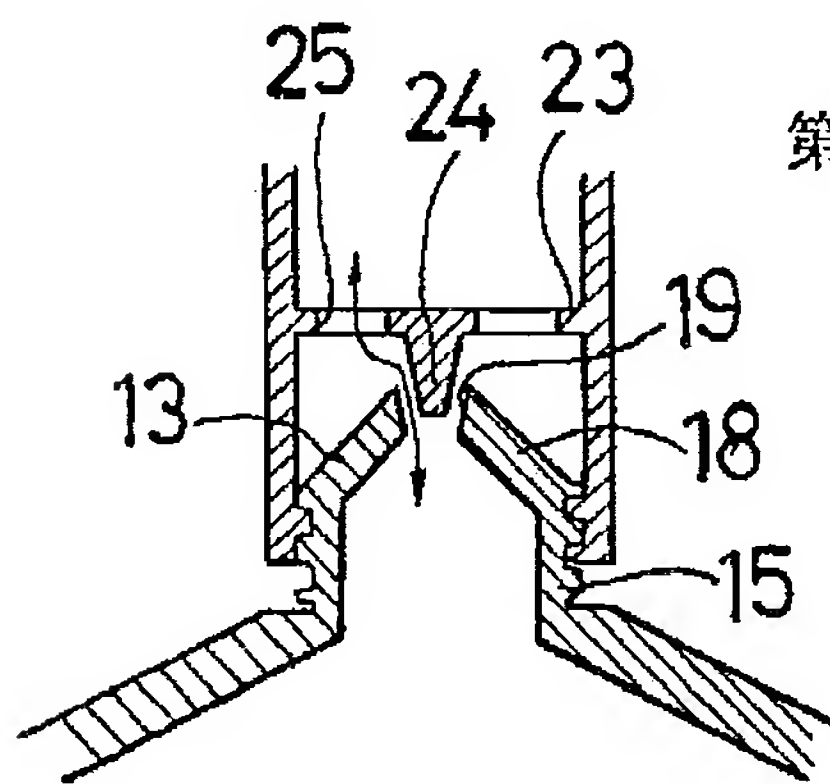
(8)

ほか1名





第 1 図

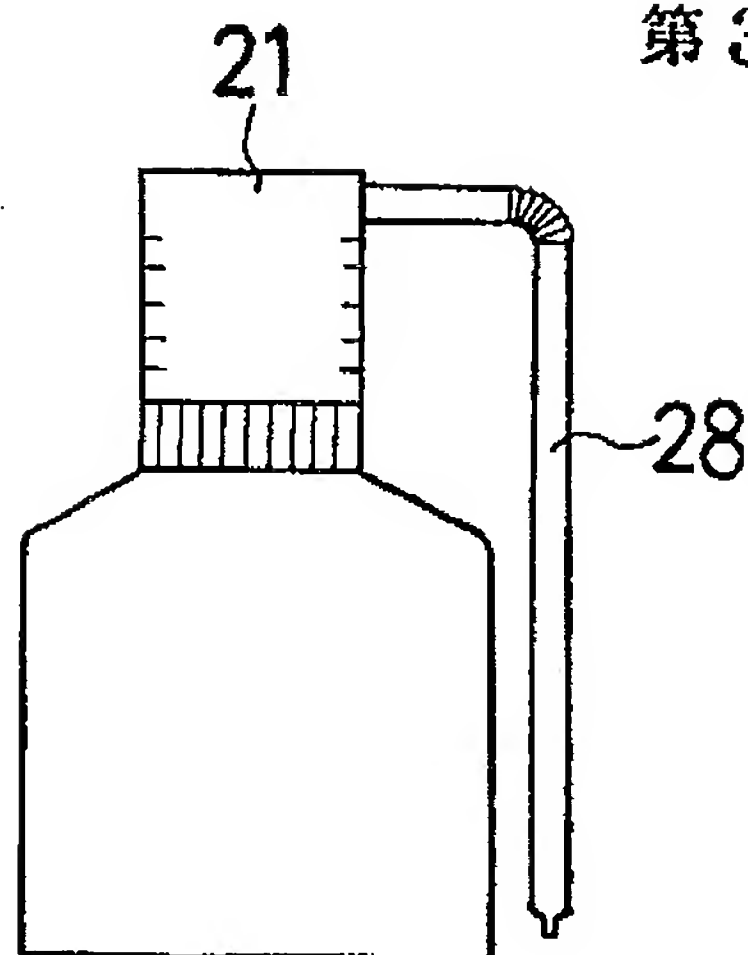


第 2 図

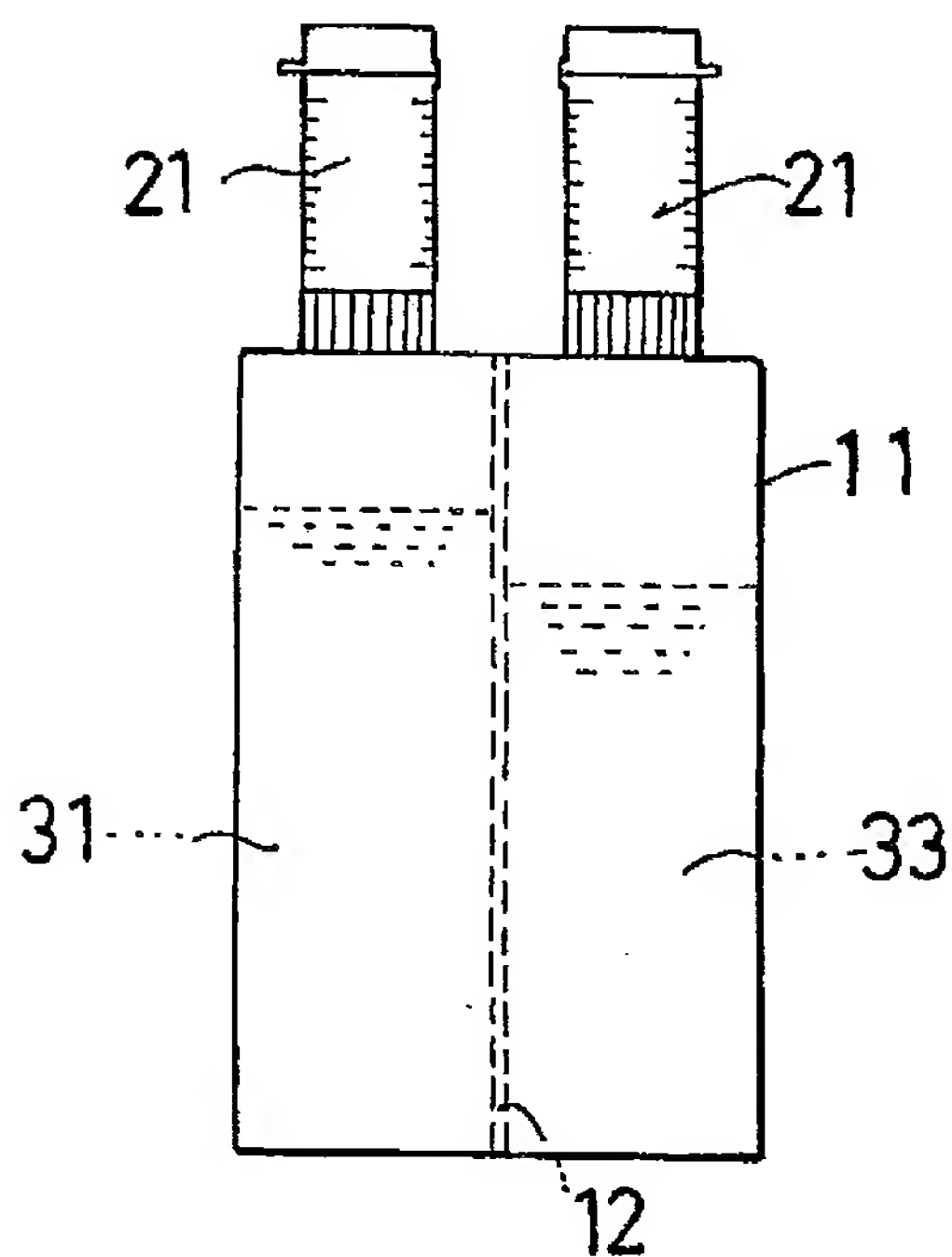
631

実開 59-14107 5
 発明者 池田正躬
 代理人 弁理士 葛田瑋子 ほか 1 名

第 3 図



第 4 図



632

実用新案登録出願人 池田正躬
代理人 弁理士 葛田瑋子ほか1名

実開 59-141075